野鳥だより

—北海道—

第４２号
編集・発行　北海道野鳥愛護会
発行年月日　昭和56年１月20日

ハチジョウツグミ　　旭川市嵐山北邦野草園　　撮影　山田良造

もくじ

探鳥地案内（津軽海峡のコクガン）…… 2

オジロワシ・オオワシの一斉調査について …… 中川　元 … 3

ビルの谷間の小鳥の村 …… 木内　栄 … 6

裏庭の小鳥 …… 苣野寿衛吉 … 8

やぶにらみ野鳥撮影論 …… 小山政弘 … 8

探鳥会報告 …… 野幌・ウトナイ・小樽 …… 10

探鳥会案内 …… 11

鳥民だより …… 12

編集後記 …… 12

探鳥地案内 ⑫

津軽海峡のコクガン

◆**位置**　戸井町・函館市・上磯町・木古内町・松前町。

◆**概況**　北側は冬期季節風を防ぐ山、海岸には干潮時に現れる岩磯地帯があり、中小の川が多く流入している。沿岸にはアマモ・アオサ等の藻類が多く、養殖場がある。

◆**交通**　国鉄函館駅又は五稜郭駅より江差松前線。バスは本数は少いが函館から出ている。

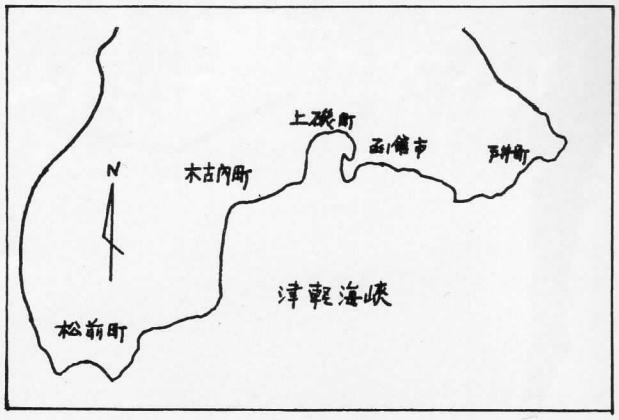
◆**探鳥コース**

A：上磯町茂辺地駅下車３分で茂辺地河口海岸に出る。運がよければ目前に見える。スコープ持参の方は傍らのトンネル出口駐車場から沖の浮玉海域で並んで採餌中のものが観察出来る。西に戻って漁港の隣より岩磯地帯が続く函館湾境界の燈台下を通って男子修道院下の当別駅に着く。行程５km、時には100羽以上が休息、採餌をしている。１月以降がよく、満潮には磯ではみられない。

B：木古内町札刈駅下車札刈漁港周辺より泉沢駅前海岸迄約４kmの岩磯地帯でみられる。１月中旬以降が良く茂辺地、当別より少いが近くで見ることが多い。

C：自動車コース、戸井町は稀、函館市は少く、松前町は毎年期間が短かく数も少い。移動その他により徒歩コース以外の海域でも観察される。

◇特記　日の出より日没まで見られるが、時期、潮の干満で場所により出現時間に差がある。総個体数調査の方は重複をさけスコープで沖合を含め全域の調査が必要である。1973年より1980年迄に約10倍分布域を拡大しているので探鳥には十分御留意を。



森口和明　〒040　函館市新川町６－１

道東一帯で行われたオジロワシ・オオワシの一斉調査について

中　川　　元

はじめに

知床をはじめ、道東の海岸線一帯は、冬期に渡来するワシ類が数多く見られ、一度に100羽以上のオジロワシ・オオワシを見ることもまれではない。それだけに地元の関心も高く、羅臼、斜里両町では早くから郷土研究会々員天然記念物監視員らの手によってワシ類の調査保護活動が行われてきた。羅臼町では昭和53年と54年の2月にこれらの人の手によって町内の一斉カウントが行われ、両種あわせてそれぞれ65羽、214羽が記録されている。（54年の記録は北海道教育委員会によるオジロワシ・オオワシ特別調査報告書—1979—の中に集計されている）

今回実施された一斉調査は、斜里・羅臼両町郷土研究会が中心となり、道東各地の野鳥観察者の参加のもとに行われたものである。結果は、ガリ版刷の報告書にまとめられているが、その概要をここに紹介する。

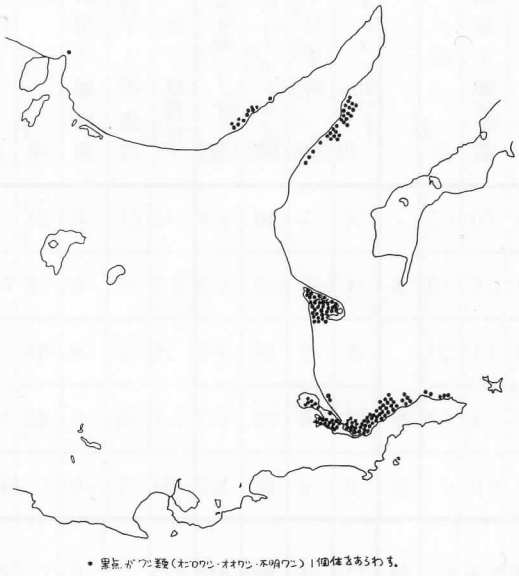
◆日時、調査地域、方法

昭和55年1月27日、2月17日の2回、9時から30分間の一斉カウントを実施した。調査地域は能取岬から知床、尾岱沼、風蓮湖を経て厚岸に至る海岸線と釧路湿原である。ただし、道路がなかったり、冬期間閉鎖されている所も多く、スキーも利用したが、全地域をカバーすることはできなかった。参加者は1月27日が57名、2月17日が68名である。用具は双眼鏡とプロミナーを使用した。ワシ類は樹上や上空を飛ぶものは距離も近く双眼鏡で識別可能であるが、流氷上に遠く散らばるものにはプロミナーが不可欠である。しかしながら、全調査区（38区域）にプロミナーをそろえることができず（測量のトランシットまでも動員されたところもあるが）両種の識別不明ワシ（特に流氷が着岸していた2月17日）の割合が増える結果となった。範囲も広く、調査参加者も多かったため、中川のほか、涌坂周一、三浦二郎、高田勝、橋本正雄の各氏が各地域の参加者との連絡、結果や気象データー等の集計にあった。調査日の設定については、流氷の接岸前後がワシ類の渡りのピークになると考えられたため、斜里海岸へ接岸する1月下旬と根室海峡へ流氷の流れ込む2月中旬を調査日とした。

◆結果と考察

カウント数と分布は表と図に示したとおりである。1月27日の調査では知床に少なく、根室半島、風蓮湖、尾

ワシ類の分布（1980. 1. 27）



ワシ類の分布（1980. 2. 17）

● 黒点がワシ類（オジロワシ・オオワシ・不明ワシ）1個体をあらわす。

調査地別カウント数 （昭和55年1月27日）

市町村名		網走市				斜里町									羅臼町								
調査地区		能取岬	トーフツ湖	小計		トーツル湖～以久科	峰浜～知布泊	知布泊～金山川	金山川～オシンコシン岬	オシンコシン岬～チャシコツ岬	チャシコツ岬～幌別川	幌別川～知床五湖	小計		オショロッコ川～ルサ川	ルサ川～岬町	岬町～サシルイ岬	サシルイ岬～ずい道	ずい道～望郷台下	望郷台下～松法川	松法川～植別川	小計	
オジロワシ	成	1	0	1		—	—	2	1	2	0	—	5		—	0	2	0	3	0	1	6	
	幼	0	0	0	1	—	—	0	0	1	0	—	1	6	—	1	0	0	1	0	1	3	9
オオワシ	成	0	0	0		—	—	1	1	0	1	—	3		—	1	5	3	1	1	0	11	
	幼	0	0	0	0	—	—	0	1	0	0	—	1	4	—	2	1	1	0	0	1	5	16
不明ワシ		0	0		0	—	—	0	0	1	0	—		1	—	3	0	0	0	0	0		3
計		1	0		1	—	—	3	3	4	1	—		11	—	7	8	4	5	1	3		28

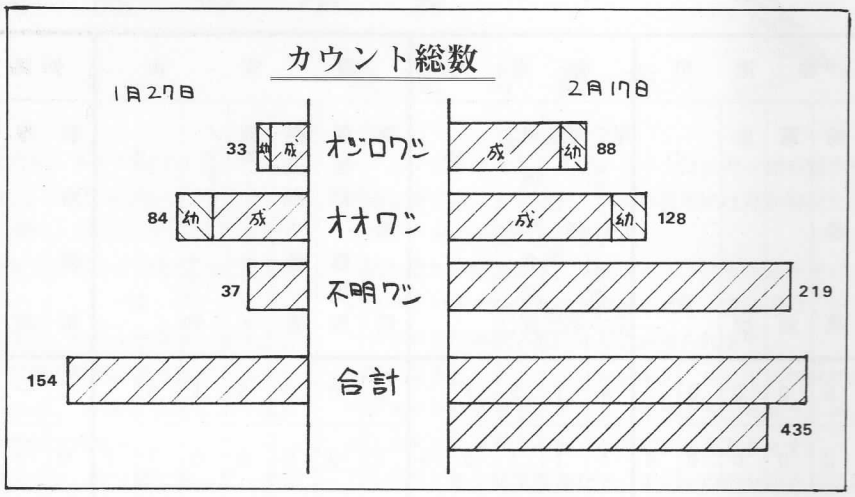
調査地別カウント数 （昭和55年2月17日）

市町村名		網走市				斜里町									羅臼町								
調査地区		能取岬	トーフツ湖	小計		トーツル湖～以久科	峰浜～知布泊	知布泊～金山川	金山川～オシンコシン岬	オシンコシン岬～チャシコツ岬	チャシコツ岬～幌別川	幌別川～知床五湖	小計		オショロッコ川～ルサ川	ルサ川～岬町	岬町～サシルイ岬	サシルイ岬～ずい道	ずい道～望郷台下	望郷台下～松法川	松法川～植別川	小計	
オジロワシ	成	1	0	1		0	1	1	0	1	0	0	3		4	1	10	4	43	1	0	63	
	幼	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	3	6	1	0	0	2	5	0	0	8	71
オオワシ	成	1	1	2		1	1	2	5	11	0	1	21		5	0	24	6	26	0	0	61	
	幼	0	0	0	2	0	0	1	4	0	0	2	7	28	1	0	0	2	7	0	0	10	71
不明ワシ		1	0		1	1	2	0	2	1	4	0		10	0	0	60	102	34	1	0		197
計		3	1		4	2	4	4	11	16	4	3		44	11	1	94	116	115	2	0		339

標津町					別海町					根室市							釧路支庁管内					総計	
崎無異	薫別	忠類	小計		尾岱（トビカリ～春別川沼）	尾岱（野付半島沼）	風蓮湖（走古丹北半部）	小計		春国岱	温根沼～幌茂尻	幌茂尻～穂香	穂香～ノッカマップ	ノッカマップ～ノサップ岬	小計		釧路湿原	厚岸湖	浜中湾	小計			
0	0	0	0		4	1	2	7		2	0	0	3	1	6		0	—	—	0		25	
0	0	0	0	0	1	1	1	3	10	1	0	0	0	0	1	7	0	—	—	0	0	8	33
0	0	0	0		5	1	7	13		5	9	4	14	2	34		0	—	—	0		61	
0	0	0	0	0	2	0	3	5	18	5	4	1	2	0	12	46	0	—	—	0	0	23	84
0	0	0		0	14	4	12		30	0	2	1	0	0		3	0	—	—		0		37
0	0	0		0	26	7	25		58	13	15	6	19	3		56	0	—	—		0		154

標津町					別海町					根室市							釧路支庁管内					総計	
崎無異	薫別	忠類	小計		尾岱（トビカリ～春別川沼）	尾岱（野付半島沼）	風蓮湖（走古丹北半部）	小計		春国岱	温根沼～幌茂尻	幌茂尻～穂香	穂香～ノッカマップ	ノッカマップ～ノサップ岬	小計		釧路湿原	厚岸湖	浜中湾	小計			
—	0	—	0		1	1	—	2		0	1	0	1	0	2		0	1	0	1		72	
—	0	—	0	0	2	2	—	4	6	1	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	1	16	88
—	0	—	0		6	0	—	6		2	5	0	5	1	13		0	2	0	2		105	
—	0	—	0	0	2	0	—	2	8	1	1	1	1	0	4	17	0	0	0	0	2	23	128
—	1	—		1	5	0	—		5	0	2	0	3	0		5	0	0	0		0		219
—	1	—		1	16	3	—		19	4	9	1	10	1		25	0	3	0		3		435

岱沼に数多く記録された。この年は例年に比べ流氷の着岸が遅く、この日は全調査地とも流氷の着岸はなかった。しかし、尾岱沼と風蓮湖はすでに結氷し、根室半島は沿岸浮氷が岸から1kmほど伸びていた。ワシ類は知床では主に樹上で見られたが、尾岱沼、風蓮湖、根室半島ではほとんどが氷上に見られたものである。



2月27日の調査ではオジロワシ、オオワシがあわせて435個体カウントされたがその8割近くは羅臼町の海岸で記録されたものである。この日は流氷本体が斜里海岸に接岸しており、根室半島や標津海岸にも流氷の着岸が見られた。羅臼海岸は大小の流氷帯と開水面の交錯している状態であった。カウントされたワシ類はほとんどがこの流氷上に見られたものである。

この2回の調査結果から考えられたことは、ワシ類の渡りには氷の存在が重要な役割を果しているということである。それは流氷に限らず、沿岸氷や湖面の氷についても同様であることは1月17日の調査結果からも知ることができた。この時期のオジロワシ、オオワシは主に魚や水鳥を餌としていると考えられ、餌場である海上や湖上に浮ぶ氷の存在は、休息と食事の場を提供している。2月17日の調査で羅臼町の海岸に多数のワシ類が記録されたことについては、この時期のスケソ刺網漁との関係が考えられた。調査日前後の羅臼漁協のスケソ漁獲量は、1日280〜560トンにもなっており、130隻の魚船から廃棄される雑魚、刺網からはずれた浮遊スケソはワシの格好の餌となっていた。実際、流氷の間をぬって走るたくさんの魚船、そのまわりの氷上に羽を休め海上を乱舞する数百のワシの姿は、岸から見ていても壮観であった。

オジロワシ、オオワシの渡りのコースについては、今回だけの調査では確実なことはいえないが、流氷がオホーツク海南部に達する以前から、数多くのワシ類が根室の海岸や尾岱沼に見られたこと、羅臼でのスケソ漁の開始とともに急に数が増えたことなどから、オホーツク海北部から流氷に乗って渡来すると考えるよりも、千島列島沿いに南下したものが、道東の氷の状態や餌の条件の整った時点でクナシリ島から数多く渡来すると考えるほうが自然ではないだろうか。

この調査は今冬も行われる予定である。道東で野鳥観察を続けられている多くの方々に参加していただければ幸いと思っている。

〒099-41　斜里郡斜里町本町41　斜里町立知床博物館内

ビルの谷間の小鳥の村

木　内　　栄

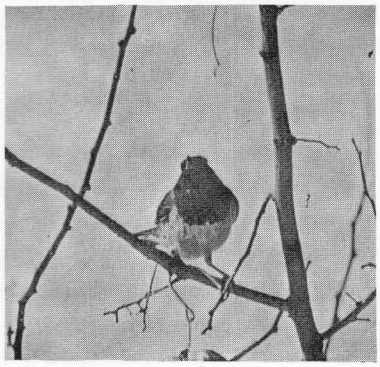
札幌・地下鉄「平岸駅」から歩いて5分、木の花団地に隣接した5階建13棟275戸の分譲マンション。これが、平岸スターハイツです。

昭和55年3月29日、町内会の総会で「平岸スターハイツ小鳥の村」が正式に発足しました。

ここでは、その経緯等を紹介します。今後のこうした活動の参考となれば幸いです。

私は以前、小沢広記さん（札幌市南区藤の沢、小鳥の村名誉村長）が世話をしている野鳥の給餌台、そして、野鳥への給餌から、日本で初めてのテンの餌付やキツネとの交流へと発展した平井さん（札幌市中央区界川）の給餌台と、そこに来る野鳥を見せていただいたことがあります。そしていつかは自分もやってみたいと思っていました。昭和49年、この団地に移って来た時、せめてシ

ジュウカラだけでも来てくれないかと思ってはじめました。この団地は市街地の中にあり、他の給餌活動をしている方々の環境と比較して最も条件が悪いと思われていました。庭木の一本もない20坪ほどの庭に、ぽつんと立つ給餌台。そこに1羽のスズメが入るのに、1ヶ月程かかったものです。驚いたのは、「スズメを寄せておくことが基本だ」と教えてくれた小沢広記さんの「1ヶ月はかかる」との予想が、的中したことでした。その後は、あれよあれよという間にシジュウカラ、ヤマガラ、アカゲラ、ヒヨドリ、そしてヤマゲラまで訪れるようになりました。面白くて、夢中になって、そんな気持のまま、周囲の人にも勧め、何人かの人達がまき込まれました。それぞれ自分のやり方と楽しみ方で夢中になって給餌や写真をはじめました。町内会の夏祭には毎年、給餌台へ来る野鳥のスライドを見せてきました。昭和54年に、日本では59年ぶり、オスは初めての、ノドグロツグミの飛来が確認されました。また、その年の愛鳥週間には、キレンジャクの群がる給餌台の写真が新聞で紹介されたりしました。そして昭和55年3月13日、前年と同一個体と思われるノドグロツグミの飛来があり、不明とされていた鳴き声も確認されました。各報道機関が比較的容易に、しかも素晴らしい写真を撮り、一斉に報道しました。と同時に10種類ほどの鳥達が、目前で群れて餌をとる様子に、驚いたようでした。そのことが尾を引いてか、何度も新聞、ラジオ、テレビ等にとり上げられる結果となりました。何人もの愛鳥家や写真家も訪れました。「鳥の写真て、こんなに面白いとは思わなかった」と4日も5日も通ってきて、しまいには仲間も連れてきたスタジオ経営者もいました。



こうしてごく自然に「小鳥の村」発足のふんい気が生まれたのです。私の個人的事情としては、

① 個人個人で、ばらばらに続けることに、あらゆる面で限界を感じてきたこと。

② 札幌市内で昨年、スズメの周年の給餌から個人と町内会の4年にわたる対立が極限状態となり、その苦情処理と愛鳥活動普及の障害となることを心配し、小沢さんと対立解消の為その地区に出かけた経験があったこと。

③ 愛鳥活動の普及という仕事がら、アピールのしやすい、意外性の高いモデルとなりうる、と判断したこと。

④ 給餌活動と自然保護にかかわる理念、あるいは論理の一応の整理ができたこと、等々。

沢山の事情があり、小鳥の村を始めてみる気になったのです。

小鳥の村発足記念として、野鳥のアルバムを出版しました。その巻頭には「大都市の団地生活では、自然とのふれ合いが希薄になりがちです。自然からの使者とも言える野鳥を通じて、できるだけ多くの人達が、自然とのかかわり合いを持ち、日常生活にうるおいを得ることを希望します」と書かれています。表紙には、この小鳥の村のシンボル鳥であるノドグロツグミの写真が白黒で印刷されています。また49年秋からこれまで、この小鳥の村で確認した45種類の野鳥のリストと20枚のカラー写真が入っています。

小鳥の村の世話をする人は、全員世話役となります。発足時は13名で、年の順に並べました。さらに増えていく気配です。経費も労力もすべて世話役の奉仕としました。苦痛に感じるまで続けてもらうことになっております。鳥を個人の趣味から小鳥の村という広がりを持たせる、あるいは、持たせざるを得なくなる。その過程や背景には、給餌をする同好の士、隣り近所、家族、職場、いわゆる自然保護家、リンゴをわけてもらう農家、町内の人達、鳥にまったく興味のない人達等々……しまいには、給餌台のすぐそばで10数匹のノラ猫に毎日々々餌をやる趣味のある動物好きの隣人等、沢山の人達を意識する必要がありました。こうした愛鳥活動が特殊な人間は別として、他人とのトラブルの原因になるようでは、何の意味もないものと思います。小鳥の村を成功させるには、鳥との関係より第一に人との関係に充分注意を払う必要があると考えています。そしてこのような小鳥の村がさらに次々と小鳥の村を誘発し、各地に沢山の小鳥の村ができること、節度ある給餌活動が定着し沢山の人達がそれに参加し、鳥の生態や習性等について多くの疑問や発見が生まれ続けること、鳥に関する話題がたえなく、その楽しさや面白さに多くの人がまき込まれ夢中になっていくことを希望します。

〒062 札幌市豊平区平岸1条5丁目
平岸スターハイツ B—5の101

裏庭の小鳥

苣野寿衛吉

騒々しい街なかの小庭でも、多少の樹木があると、案外たくさんの野鳥が訪れるものだと思います。うちの庭に出入りする小鳥は、スズメ以外は山の鳥ばかりですが、何年に一度という珍客を含めると50種位にはなると思います。

スズメ、カラス、ヒヨドリ、シジュウカラ、シメ、アカゲラなどが常連です。日蔭の根雪が消えるゴールデンウィーク頃は、常連のほかに、冬鳥も夏鳥も入り乱れて、一年中で庭が一番賑やかな時です。

アトリ、ツグミ、レンジャク、ウソ等に混って、アオジ、ルリビタキ、ノゴマ、キビタキ等がほぼ毎年立ち寄ります。クロジ、オオルリ、ヤブサメ、ビンズイが来る年もあります。キジバト、カワラヒワ、モズ、コムクドリは夏の間逗留して、うちの周りでヒナを育てているようです。

若葉が開いてくると、センダイムシクイ、メボソムシクイ、アカハラが訪れます。浅い盆に水を入れて出して置きますと、小鳥達は、喜々として水浴びをします。行水をすませたアカハラの夕方の声は、なかなか幽艶です。カッコウも毎年1～2度は声をかけていきますし、稀にウグイスが鳴くこともあります。

数年前のことですが、畑を起していると、近くでポッポッポという音がしました。まさかと思って仕事をしていると、またポッポッポ。音のする方に少し近づいたとたんに、笹藪の中から横縞模様のハト位の鳥が飛び立ちました。ツツドリです。意外な所に意外なものがいるものだと感心しました。

サクランボやモモの実には、果肉食の色々の小鳥が集まります。メジロは一つのモモの実の周りに車座になり、シアシアジクジクと喋りながらつついています。

マツカサにはイスカが来ます。枝先のマツカサをくわえて枝元に戻り、脚で押えて嘴で種子を取り出すと、ポトリとマツカサを落します。イスカはこの一連の動作を何回も繰り返しますので、マツの根元には掃き寄せたようにマツカサが集められます。

秋の渡りの時期には、トラツグミ、アカショウビン、オオコノハズクが来たことがあります。雪が近づくと、ミソサザイが物置小屋に入るのが見られます。

冬になると、ツグミ、レンジャク、ムクドリの群れがナナカマドに来ます。アトリ、ヤマガラ、ヒガラ、エナガ、カケス、コウライキジが来ることもあります。

コウライキジは家族連れで、オンコの梢をねぐらにして一冬を過します。来た当座はなかなか慎重ですが、次第に大胆になり、しまいにはノコノコと車道へ出ていきますので、ハラハラさせられます。

カケスには幾つかの面白い習性がありますが、私が庭仕事をしていると、頭のすぐ上へきて、甘え声で何か頻りに話しかけます。私をクマの仲間だと思うのでしょう。

冬庭で見ごたえのあるのはハイタカです。西風に乗って小鳥の群れを急襲するのです。獲物をわしずかみにして雪の上に降り、直ちにパッパッと羽毛をむしり取ります。眼光烱々威風あたりをはらうの慨があります。ハイタカの食事が終るまで小1時間、物蔭に身を伏せた小鳥たちは、凍りついたように微動もしません。

ハイタカが去って空襲警報を解除するのはいつもシジュウカラです。シジュウカラが動き出すと、今まで息を殺していた小鳥たちも、そっと頭を起してあたりを見廻しますがまだ動悸が治まらないといった様子です。冬庭で小鳥の姿が見えないときは、きっと近くにハイタカが潜んでいます。

数日前、久し振りにヤマゲラが訪れました。この冬は何か珍しいものが来るのではないかと期待しています。

〒063　札幌市西区山の手4―5

やぶにらみ野鳥撮影論

小山政弘

(1) 撮らぬための論理

クルックシャンクや下村兼史の鳥の写真は実に味わいがある。新しいところでは、ドルトンや入江智一も優れたユニーク性を感じさせてくれる写真家だ。彼等の共通点は、いいかげんの作品は決して公表しないところにある。それ程に自分の人格と写真作品を同一視しているわけだ。

経済的に生活が充たされ、誰が撮っても良く写るカメラが手軽に入手できる昨今、野鳥撮影人口もウナギ登りの増加だ。そして、いたるところで野鳥の写真作品が目につくようになった。

父のキャビネ判暗箱から始まった私の写真生活は、野鳥観察を始めるといつのまにか、そこにも及んでしまっていた。振り返るのも悪ぞましい。何か一種の業(ごう)のようにさえ思えてくる。だから、私には写真作品を一つ見ると撮影者の人格として受けとってしまう、どうにもならない習性が身についてしまっている。

一枚の鳥の写真を見つめていると、闇雲に撮ったものか、やたら小細工をしたものか、エサで釣ったものか、鳥にひどく迷惑をかけたものか等が分ってしまう。その上、撮影者がその一枚の写真作品を、いいかえると撮られた鳥の「人格(?)」をどれだけ大切にしているかも分ってしまう。困った習性だ。

「生態写真」というのは、撮る側の論理と対等に撮られる側の論理が厳然として両立していなければならない領域だ。写真の上手下手よりも、撮る者が何故撮られる者にカメラを向けたのかが第一に大切なことだと思う。さらに写真を「作品」とする最終段階で、撮影者がどの写真を選び出すかが次に大切なのだと思う。それは何も生態写真に限った方法論ではないと言われる方は、もう一度考え直してほしい。作品として公開する時、撮影者がその鳥の立場をもう一度考えてみる時、初めて「生態写真」の意味が加わる筈なのだ。

科学研究用の行動分析写真と、いわゆる「生態写真」とは、そろそろ分けて考える時代かとも私は考える。鳥と自分との関わりの在り方は、だから「生態写真」の最も重要な問題なのである。とすれば「撮ること」の重要性と全く同じ価値で「撮らぬこと」の意味も極めて重要であることになる。さらに加えると、撮った後で作品として公開することの意味迄も重要になり、「公開しない」意味も極めて重要と相なるわけだ。

撮ることに馴れ、公開することに馴れてくるとこの生態写真の大原則を見失う恐れがある。作品として公開する時、今一度撮った時の記憶を引きもどし、写された鳥と対話し直すべきである。モノクローム写真ならば、注意深くていねいに焼き直し、鳥に敬意を表するくらいは是非したい。

(2) 機材選びの論理

写真の原理はダゲレオ時代と何も変らぬが、カメラやレンズ機構の変容には驚くものがある。残念なことに野生動物生態撮影用のカメラやレンズは今日もなお殆んどない。機材は、使う人の好みで選ばれるのだから十人十色だ。

画質の良さを求めて原判サイズの大きいカメラを使う人もいれば、撮影時の機動性を第一に求める人もいる。その両方で満足できればそれに越したものはない。

私は、この10数年間で望遠レンズだけでも6種遍歴した。その毎に金を捨てている。この過程で、私は最終的画質つまり撮った時の雰囲気を含めて思い通りの表現をしてくれるレンズは、レンズ枚数の最も少いアクロマード型2枚1群レンズであるという結論を得た。

考えてみると窓から見る景色は二重窓より一重窓の方がよく見える。出来ればガラスなど無い方がよいのである。レンズも同じなのだ。国産のレンズは、レンズを短かくしたり解像力だけを高くする工夫はよくされているが、自然な描写、そして自然な操作性は無視されている。既に骨董品クラスとなったが、旭光学社製772—500ミリF5は国産品の中では優れた逸品だ。古物でも売りに出されているのを見たら是非買うべきだろう。

西独ライツ社製テリート560ミリF6.8、400ミリF6.8も優れたフンズだが何せ高価なのが欠点だ。現在、入江智一君が愛用している。

私は最近同じ西独のノボフレックス社製ノフレクサー400ミリF5.6を個人輸入して、その性能の高さに驚き大いに満足している。600ミリF8も揃っている。画質や発色に確かな主張があるのは論を待たず、何といってもその焦点調節方式の独創性を高く評価したい。レンズ鏡胴がピストル型をしていて、握ると無限遠、ゆるめると至近方向にピントが調節される。その動きが誠にスムーズで微細だ。おまけにこのレンズはテリート同様最初から手持撮影用として肩当てガンストックをオプションで用意してある。セットを構えるとまるで自動小銃のようなスタイルとなる。

以上紹介したレンズは何れも最も原始的で単純なレンズ構成の2枚貼り合せアクロマート型で共通している。道具は単純な程よい。

レンズ等何でもよさそうなものだが、よりよい生態写真を求めていく過程で、自分の好みに合う道具の遍歴はある程度必要なことのようである。

三脚固定では限定されるアングルも自在な手持撮影に徹すれば身体の一部としてカメラが働いてくれる。

(ノフレクサーの個人輸入の方法をお教えいたします。小山迄お申しつけ下さい。)　　(つづく)

野　幌

55.10.26　8：30〜14：20

長谷川 涼 子

去年の秋から「探鳥会」に参加させていただくようになり早１年、いろいろな鳥たちに出会う度野鳥図鑑を開いては、今度はこの鳥を、あの鳥もと、だんだん欲が出てすっかり鳥キチになってしまいそうです。

回を重ねるごとに生態、鳴き声、飛翔ぶりと、ベテランの御指導の下、どうにか探鳥のお面白さが分りかけてきたところです。

この日は、暴風雨警報の出ている生憎の天気、５日前の雨の日に、柳沢さん、野々村さんと一緒に歩いた時、レンジャク、マヒワ、ウソ、ツグミ、それにカラ類の群れに出合い、とても感激し、晴れた日より曇りがちの方が、鳥がよく出るという先輩方の言葉を実感した次第です。もしかしたら今日もと、期待しながら雨ガッパを着込んで出掛けました。

紅葉も色あせ落葉を踏締めながら、いつものユズリハコースへ入りました。すぐに「クイ、クイ」と賑やかな声、冬鳥のツグミです。ツグミの群れの中にはアカハラ、シロハラ、マミチャジナイ、などが入っていることもあるとか、目を凝らし双眼鏡を視きましたが私の目にはどれも、これも、ツグミの姿ばかり、羽田さん柳沢さんは、マミチャジナイを確認されて、やはりベテランの方々ですね。

大沢の池では、対岸近くの柳で鳴いているベニマシコを、野口さんが見つけられ、「どこ、どこ」と皆んなで居場所をお教えていただく。少し遠いのが残念。

大沢園地の山モミジの紅葉の美しさに感動し薄日の射す日溜まりで昼食。

桂コースでは、枯葉の吹雪と雨に遭い、秋の深さをつくづく感じました。

ハシブトガラはおいしそうに熟れたコクワを啄んでいます。

キバシリもよく姿をみせてくれました。あの雪のように白いお腹と、地味なマントが印象的です。ミソサザイとは初対面、動きの速さには驚きました。

参加者は９名と寂しい探鳥会となりましたが、風で落ちた山ブドウを口に含みその甘酸ぱさに野幌の自然に浸った１日でした。

（記録された鳥）トビ　エゾライチョウ　キジバト　アオバト　ヤマゲラ　アカゲラ　オオアカゲラ　コゲラ　ハクセキレイ　ヒヨドリ　ミソサザイ　ルリビタキ　アカハラ　マミチャジナイ　ツグミ　ウグイス　キクイタダキ　ハシブトガラ　ヒガラ　ヤマガラ　シジュウカラ　ゴジュウカラ　キバシリ　カシラダカ　カワラヒワ　ベニマシコ　ウソ　シメ　スズメ　ムクドリ　カケス　ハシボソガラス　ハシブトガラス　種不明カモ　（34種）

（参加者）柳沢信雄・千代子　野口正男　金沢保三　早瀬広司　長谷川涼子　渡辺紀久雄　北尾　諭　羽田恭子

（担当幹事）早瀬広司　北尾　諭

〒003 札幌市白石区本郷通12丁目南１の17

ウトナイ湖

55.11.16　10：00〜13：30

金 澤 保 三

入会以来４度目の探鳥会、しかも始めて見るウトナイ湖だけに楽しみに今日を迎えた。午前10時に湖畔に到着し、担当幹事の説明があり、終って岸辺に立った途端、上空を旋回していたハヤブサが突然狙いをつけてコガモの群れに急降下した。幸い鷲づかみにされることもなく終ったが、特有の精かんさをまざまざと私達に見せつけた。

新雪を冠った山々の美しさを背景に、晩秋の陽光に照らされた湖。まさに水鳥にとってウトナイ湖は最適の地と申してよいでしょう。薄氷の張ったところを避け、あちこちに別れた沢山のカモの群れの中ですべるように遊泳するハクチョウの優雅な姿、また着水も仲々でただ見とれるばかりでした。羽田さんから頂いた「カモの見分け方」と云うテキストにより多少の予備知識はあったが、レンズに映るホホジロガモのかわいらしいしぐさ、またハシビロガモの鮮やかな羽毛に心を打たれ短い時間でしたが自然のすばらしさを満喫することができました。

そのほか雁の群れ、オジロワシの勇ましい姿などを眺めては去り行く秋、そして迫り来る冬の厳しさを知らされました。

解散後、ウトナイ湖ネイチャー・センターを見学し、岸辺近くで愛想をふりまくコブハクチョウ、羽を傷つけたオオハクチョウと別れ帰路についた。

これからも探鳥会に参加し多くの野鳥達と出会うことを楽しみにしています。

（記録された鳥）アオサギ　ガン（ヒンクイ？）　コブハクチョウ　オオハクチョウ　コハクチョウ　マガモ　カルガモ　コガモ　ヨシガモ　ヒドリガモ　オナガガモ　ハシビロガモ　ホシハジロ　キンクロハジロ　スズガモ　ホオジロガモ　ミコアイサ　ウミアイサ　カワアイサ　トビ　オジロワシ　ハヤブサ　コウライキジ　ハマシギ　カモメ　ウミネコ　ヒヨドリ　シジュウカラ　カシラダカ　スズメ　ハシボソガラス　ハシブトガラス　ツグミ　ＳＰ．（33種）

（参加者）清水　幸・朋子・亜樹子　萩　千賀　野口正男　長谷川涼子　福田三和子・久美子　米山露子　猿子正彦　渡辺紀久雄　竹内康雄　野々村　菊　柳沢信雄・千代子　北尾　諭　宇佐美金悦　羽田恭子　金沢保三（19名）

（担当幹事）柳沢千代子　北尾　諭

〒001　札幌市北区屯田４条１丁目２の５

小　樽　港

55.12.14　10：30～14：30

高　橋　明　子

慣例の12月の小樽港内探鳥会。といっても今年は例年のように港へ船が出せないため、港周辺を歩いての探鳥です。折悪くぬれ雪で、こんな日に何人参加するのかなどと危ぶみながら集合場所の小樽駅へ向いました。

札幌からの30名近い参加に、小樽勢はすっかり圧倒されて、駅からまっすぐ港へ。「日本野鳥の会小樽支部」と緑鮮やかに染めぬいた旗を掲げたM氏を先頭に、なんとなく賑やかな２列の行列になって、それを「おや、なんだろう？」と立ち止まって眺める人もいました。

大きな望遠鏡やカメラ、望遠レンズをかついでいる人、みな長靴にアノラック。コール天ズボンに短靴の私からみれば皆、いかにも年期の入っている様子です。

製缶附近の運河では、ユリカモメの群舞をひととき、眺めました。鈍色の運河の水にユリカモメの紅と白がひときわ目立ちました。すぐそばの建物の間にヒメウが２羽。かれらはいつもこの岸壁で憩っているのです。

自家用車で先行し、鳥がいるかどうかさぐりにいっていた人から伝言が届きました。ここから北はあまり姿がみえないので、南の埠頭へひき返せとのことです。

小１時間で、すっかり帽子も手袋も雪でびしょびしょ。月見橋を渡って、船客待合所で煖をとりました。岸壁づたいに第三埠頭方面へ歩いてゆくと、防波堤の内側に、鴨らしい姿がちらちらしています。そこへ、割りこんできたのは巡視船。驚いてとびたつ20羽ほどの群れに、誰かが「ホオジロガモだ！」と叫びました。少し先にやはりホオジロガモが80羽ほども群れています。「おや、クロガモもいる」とまた誰かがつぶやきました。早速かまえた望遠鏡を、ひとつひとつのぞかせていただきました。

ほとんど同じ方向をむいて、どうやらお昼寝の時間らしく、３分の１が羽に顔をうづめています。俳句の同人のMさんが「浮寝鳥」というのは、冬の季語です、と教えてくれました。ウミウが１羽、一生懸命もぐっては魚をとっているようです。手前にカイツブリが１羽みえます。雪で視界が悪く、色彩もよく判別できないので、「あれはミミカイツブリか？　ハジロカイツブリか？」ということが、争点です。

カイツブリを判別するのに、首をかしげては、何度も何度も望遠鏡をのぞきこむ人、じっと図鑑をにらんでいる人……。

昼食をとりに道新の三階会議室へ戻ると、もう暗幕がはられ、これもまた慣例の甘酒が用意されていました。びしょびしょになった衣服を乾かしながら、甘酒に舌を焼き、トラツグミ、ムギマキなどの珍らしいスライドを見せていただきました。

いつものように、海の上を歩いての探鳥ではなかったので、確認した鳥は少なく思いましたが、札幌の方に、「小樽は海も山もあって、いいですね」と話しかけられて、ほんとうにそうだと、しあわせな気持で、おにぎりをほおばりました。

（記録された鳥）小型カイツブリ（ミミカイツブリかハジロカイツブリか不明）　アカエリカイツブリ　ウミウ　ヒメウ　クロガモ　コオリガモ　ホオジロガモ　ユリカモメ　オオセグロカモメ　シロカモメ　カモメ　ウミネコ　ハクセキレイ　スズメ　ハシボソガラス　ハシブトガラス　ドバト　（17種）

（参加者）清水　幸・朋子　鶴崎展巨　中野　進　渡辺紀久雄　福田久美子　野口正男　早瀬広司　叶野駒夫　馬場象三　谷口一芳・登志　曾根モト　北尾　諭　梅木賢俊　羽田恭子　野々村　菊　長谷川涼子　柳沢信雄・千代子　藤原直人　武田忠義・勝利　竹内康雄　猿子正彦　亀尾紋十郎　26名　日本野鳥の会小樽支部　16名　計42名

（担当幹事）亀尾紋十郎　梅木賢俊

〒047　小樽市梅ケ枝町21の２

昭和56年４月までの予定をお知らせします。防寒に気をつけてお出かけ下さい。

＜野幌森林公園＞

・とき　昭和56年2月22日(日)
午前９時
昭和56年4月26日(日)
午前８時半

・集合　国鉄大麻駅待合室

２月は歩行に適したスキーが必要です。冬鳥の観察。４月は何種類かの夏鳥がみられるでしょう。

＜ウトナイ湖＞

・とき　昭和56年３月29日（日）午前10時半

・集合　ウトナイ遊園地（中央バス）（ウトナイ下車）

ガン　カモ　ハクチョウ　オジロワシなどの観察

＜野幌森林公園を歩きましょう＞

上記の探鳥会ほか、４月19日　午前８時半　大麻駅待合室集合で、探鳥散歩を行います。どうぞご参加下さい。

いずれの探鳥会も、昼食、筆記用具、観察用具をご持参下さい。

探鳥会についてのお問合せは、柳沢　651―6364 か羽田　611―0063 へ

鳥民便り

＜本会の活動のあり方について＞

本会が発足して以来、10年余の歳月が過ぎたところでありますが、このたび、江別市の小山政弘氏から「会の充実発展のために」と題し、次のような投稿がありました。

会員の皆さんは、本会の活動のあり方について何か感じられているのではないかと思いますが、この機会に、会員とりわけ札幌市に在住していない会員の忌憚のない意見、感想等をいただき、より良き活動を見出していきたいと考えておりますので、皆様の投稿をお願いいたします。

「会の充実発展のために」　　小山政弘

時の流れには無駄はない。私たちの会も今日まで続いてきた。だが、時の流れは会充実のための一大転機を今与えてくれているような気もする。北海道全域に会員を擁してはいながら、この島が思いの外広い故に会活動の恩恵は隅々まで行きとどいているとはいいがたい。そこで私は一つの試案を組み立ててみた。会の活動をもっと会員側に引き寄せる、というのが私の試案の前提となっている。多くの先達をさて置いて、差し出がましく、あまつさえおこがましくはあろうが、一笑に付される前に拙い私の試案を一読願いたい。

まず会誌「野鳥だより」の編集方式に刷新が必要のようだ。思い切って全道を数ブロックに分割し、ブロック専用の頁を設けてみてはどうだろうか。各ブロックのつまり各頁の編集責任者は、その地域独自のカラーで内容を編む工夫をする。勿論、全道的視野の頁も従来のように必要だが、ブロック別頁により執筆者の偏りを少くするとともに、自分たちの地域の頁内容の充実への努力につながり、あるいは、それを発端に地域独自の活動が盛んになるかも知れない。何よりも「野鳥だより」誌面の多彩化は推進され、より親しめる内容とはなるだろう。

次の試案は多分反対意見が多いであろう。今の「北海道野鳥愛護会」から、思い切って鳥の部分をとってしまおうというものだ。財団法人日本野鳥の会の支部が各地に生まれ、しばしば私たちの野鳥愛護会と混同されていると同時に実質活動面や社会的役割の面で、あるいは相殺してはいないだろうか。その観点から、鳥好き達の集まりから植物、獣、昆虫、ハ虫類、両生類、クモ……等々野生生物全般の各分野の会員が集まる「北海道野生生物の会」に変身してはどうかと考えるのである。北海道の自然、とりかけ野生生物については、自然保護運動の面から見ても、も早鳥好き達だけが集まって見つめている時代ではなかろう。

以上２点の試案をたたき台に、会活動充実発展論議が盛んになることを期待したい。

＜写　真　大　募　集＞

野山や庭などで撮ったあなたの野鳥の写真を次のように募集しています。事務局までお気軽にふるってお寄せください。

1. 表紙用として
   白黒６切版。種名、撮影の年月日、場所及び撮影者名を付記してください。
2. さえずり欄用として
   白黒、カラー、大きさは問いません。データの他できればあなたの近況などのコメントを付してください。
3. 愛鳥週間写真展用として
   ５月に会員写真による写真展を予定しています。大きさは４切以上、白黒、カラーを問いません。種名、撮影場所、撮影者名を付記してください。

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

昭和55年としては最後の野鳥だよりと言いたいところでしたが、とうとう新年を迎えてしまいました。

今号のオジロワシ等の一斉調査の記事は、流氷の上にいるオジロワシの姿、あるいは魚をつかんで飛び去るその姿が目に浮かび、一度は見てみたいという気持ちにさせられました。道内各地には、まだまだこのような自然が残されているところがたくさんあると思いますので、今年も各地の話題、見聞されたものをたくさん投稿されるようお願いいたします。　（白澤記）

〔北海道野鳥愛護会〕　年会費　1,500円（会計年度４月より）　郵便振替　小樽 18287
〒060 札幌市中央区北１条西７丁目　広井ビル５階　北海道自然保護協会気付 ☎（011）251―5465